

Aomidorism 1

Ishida Takahiro

目次

Aomidorism	3	Millionth	4	虹	5
空の記憶	6	俯瞰	8	六月	10
虚像	12	青緑	14	航海	17
朝の鳥	18	しらなみ	20	しらなみ	23
融解	27	エル	29		
The Winter Fair	37	記憶と記録	38		
凧	40	愛しむ Rainy Days	42		
Answer To L	44	月夜	46		
蛭	47	雲と魚	48	謙虚に	50
紫色の空	51	花畑	52	特異点の哲学者	54
飛ぶII	56	うれしい	58	神社の森	60
千波湖	62	詩的な弁解	63	春	64

Aomidorism

青い空と緑の森

想像だけでいい

ほんの少し

言葉の力を借りて・・・

Millionth

百万番目の秋がくる

果実が熟し 葉が染まる

僕達は眠る準備をする

風が冷たくなり

葉が吹かれ乱れ散る

何かが太陽へと溶けてゆく

すべての時間の流れが

一つに重なり合う

百万番目の秋がくる

虹

雨はいつしか止んでいた
傘をたたんで 水たまりをよけては
濡れたベンチのわきに立ちどまって
虹のてっぺんを見つめていた

雲もすっかりなくなって
虹はいつしか消えていた

飛びあがる水分子たちを
私は追いかけようとした

彼らの声がゆっくりと流れ込んできて
私はあたりを見まわした

水たまりに足を入れながら
私は虹の残像をつかまえた

空の記憶

数十億年 微かな隙間もなく
見守る様に 彼はそこに居た
私は今 彼と向かい合い
懐かしい気持ちで祈っていた

生命が蠢くたびに
彼には様々なものが放たれてきた
あるいは逆に危険な鉄が
落ちてゆくのを彼は見た

目の中にはおさまりきらない
偉大なる絵画がそこにある

太古の恐竜たちも
彼の中に浮かぶ虹を見ていたろうか
未来の命たちも彼の下に集まる
純白の雲を見るだろうか

我々はついこの前 彼を突き破り
暗黒の世界を見た
期待は尽きぬにしても
私は得体の知れない不安を抱いている
優しい色よ あなたの記憶を教え給え
過去から未来へ渡る すべての記憶を

俯瞰

1 暖かい東洋の風のひとつが
今日もこの町に緩やかにやってきた
2 水にあたった光が
私たちの目のなかで軽やかに踊る
3 今年も白い鳥があちらにこちらに
優雅に飛びながら夢を送る
4 あの道から見る広い空は
大きな雲がいくつも入り
紫色の朝焼けは
橋の上に寝転べば
星が消えてゆくゆつたりとした時間を
思い出の中に書き足してくれる
山吹色の夕焼けは

屋根の上に寝転べば
鳥が帰ってゆくのんびりした時間を
涙の中に残してくれる

ウ
ぽかぽかとした秋の縁側
じんじんとした冬の土
愛しき記憶、肌先の記憶
虚ろに庭を歩き回る

9

私の瞳が望んでいる
もっともっと見なさいと
星が光る夜
またまた寝転んで見ていると
またまた吸い込まれてゆくような
落っこちてゆくような
そう、またまた僕はひとりでに
勝手に宇宙空間へ飛び出してしまふのだ

六月

雨上がりの帰り道
午後の夕日キラキラと
まぶしく光る
まるで君の瞳だね
桑の葉のしずくが
滑らかに落ちてゆく
紫陽花の葉の裏に
かたつむりのつそりと
森の香り 誘われたら
君と二人 今日もふらり

靴のつま先泥だらけ
水溜りで洗って
黄色い傘の先っぽ
こつこつと突きながら

土の香り感じたなら
君と二人 今日もふらり

虚像

既に止んだ風を捕まえたみたい
私には理解できないところで
あなたは柔らかに微笑むから
私は不思議なほど自然に幸せな気持ちになる
あなたはその時間たいして語りかけはしない
私は時が止まったかのようにのぼせている
不意に意地悪に壊してくれるのに
私はあなたが虚像の様で恐ろしい

海の波音と森のざわめきが語り合う
私には捉えきれないほどの大きなひとつの営み
あなたは無理なくそこへ溶けこんでゆく
私を誘うけれどもこれ以上は近付けない

いま、どんな干からびかけた歌も
あなたの前に導かれ再び咲き始めた

それは遠い時代に見た地球の記憶
幾歳も眠ってきた奇跡の遺伝子

青緑

私は青緑色の森の小道を
数十種の雑草を踏みながら
微かな光に導かれるように
半分眠りながら
まるで自分に会いにゆく様に
一歩一歩進んでゆく
泥濘が通る者を歓迎し
倒木は豊かな音色を奏でる
ゆるやかな坂道を下ると
野苺が一面に寝転んでいて
私の道を完全に奪ってしまった

風が言う

「耳を澄ませ」

「恐れるなかれ」

深い色を感じる天球

瑞々しい床

野の鳥の歌を聴きながら
私はしばし眠りにつく

美しい森よ、優しい森よ
私はきつと、はじめから道をそれてしまってた
苔むした木の皮にも
湿った草の茎にも触れられずにみた
私は悔やんでいる
どうか忘れさせておくれ
その無限なる緑色の中で

細い流れを遡って
どんどん辿って行くと
いつのまにか草の中に
あの透明な瞳を見失ってしまった
再び無数の葉と枝の間から
強烈な太陽の光を受けて
私は上を見た

少しずつ乾いてゆく私の涙よ
長い道を教えておくれ

雨の日、私は閉ざされた窓の裏
一番近くを通り去る雨粒を見
遙か遠くで滑りゆく傘を思う
私は疲れている
どうか眠らせておくれ
その無限なる緑色の中で

航海

美しい太陽は 空の頂点で
僕らのことは うわのそら
ちっぽけな帆船は 海の真中で
大地の風なんて 忘れてた

心配しないで
沢山のお土産持って
必ず帰るよ

楽しげなイルカたち 顔を出しながら
僕らの船を導く様に
澄んだ鳴き声 高らかにあげて
波を這う様に泳いでゆくよ

朝の鳥

うごめく春の優しい風は
包む物すべてを光らせる
まるで薄い雲が
夜の月を柔らかくしたように

朝早く目覚めると
雀とうぐいすの声がして
僕はカーテンを開ける
一羽の鳥が檜の木を周って
どこかへ飛んでゆく
僕は彼の視界を想像する
窓を開けると
ひんやりとした空気が部屋へ流れ込む
それはいつも麻薬的で
僕を縛り付ける

西に輝く月が去ってゆく

昨夜の夢は僕の記憶のなかで
展開しはじめる

しらなみ

晴天が途切れない夏休み
人影まばらな鄙びた海岸で
一人になりたくてさまよいながら
砂に残る足跡を辿っていった
それはいつしか波の中に消えていたけれど
僕はまっすぐに歩き続けた

海とは不思議だ 儂い風と力強い自転
気まぐれな秩序に乗って 波は絶えず巡り来る

偶然ってどう思う？
波が陸地に乗り上げてくるのも
そこで君に出会うのも
偶然には違いないんだ

君は赤いシャツを着ている 少し淋しげな色だね
その下に青い水着を着ている とても甘い色だね

白い物は不思議だ

吸い込む様にひきつけてくるけど

近寄れないくらいまぶしくて

そしてとにかく神々しい

君の瞳や頬や唇や指先や膝や足首は

雪にも負けず、白く輝いている

どきどきしている 死ぬかもしれない

そんな事知ってか知らずか 君は去ってゆく

僕はやはり君にひかれ

おろかな人形の様に君を追いかけた

君を求めている

理由なく君を求めている

僕は小さな一個の生き物かもしれないけど

君は宇宙にも勝る何かだ

そして僕は科学者になり

一生をかけて君を探求しつづけるだろう

静かな波の中君を捕まえる

一瞬だけ水しぶきが上がる空間

君の体に触れる 僕の体は痺れてくる

何故だい？ 何か僕に言わないのか？

君は不思議な瞳で僕を見るだけ

僕も情熱にまかせ君を見つめるだけ

何も言えないのは同じ気持ちだからかい？

二人の行方は謎のまま

僕の休日は終焉を迎える

優しい太陽に励まされながら

僕は白い日記帳のなかを

遠い世界への入口に佇むように

呆然と見つめている

しらなみ 第二節

もの静かで穏やかな日差しの中で
凄まじい様相を見せ始める季節
相も変らぬ生活に支配される日々が
再び僕のもとへ訪れた

あの白紙のページの中には
時には一種の恍惚への招待状と
時には虚無の世界への落とし穴が
僕のみすぼらしい瞳を通して浮かび上がってくる
それが危険なことだと知りながら
僕はある日の朝早く
消極的な足取りで海岸へ踏み入った

永遠と呼ぶことも許されるだろう多大な時間
その重なりと破裂の歴史が過ぎ
今ここにある景色を僕が見つめているのは
偶然には違いない

僕はその人の顔はすっかり忘れていた
いや、そうではなく
僕にはあの人の姿が、そのまぶしさゆえに
ただ白い影としか見えなかったのだ

あのとき、僕は罪を犯したのかも知れない
普段の僕なら
決して興味本位で触れたりすることはなかった
けれどもそれは、僕の真剣な「命の働き」であり
救済を求める本能の躍動だった

僕は決して甘えていたわけではないと思うけれど
自分の弱さのせいもあって
神聖なる使命を忘れてしまったのだ

だんだん曇ってゆく海岸は薄暗くなり
やがて夜に包まれた
その日からあの白いページは

本当の白紙に戻っていたように思う

融解

僕は冷えきってしまった　君の暖かさすら奪ってしまいそうだ
このまま　氷の様に　透き通ってしまった

あなたはとても淋しがり
純粋なあなたは純水のように凍りやすく
そしてどこまでも透き通りやすく

けれども私はあなたを解かす熱素
そして私達は命を育む水になる

君の膨大なエネルギーを受け
僕は生きてきたと知る
これからもその温度に甘えてもいいかい

僕は抱かれていてもいいかい

エル

遠い昔、子供の頃の事 僕はここに住んでいた
まだ自然が沢山あった 南には森が広がっていた
たまに夜、外へ出ることがあった
森の方はさ、暗くて葉のざわめきが不気味に聞こえてきて・・・
とても怖かった

そんなこの場所を僕は一度離れた
父の転勤のため、引っ越し事になってしまったんだ
その間際、僕は暇つぶしにその森を通る道へと入ってみた

ドキドキする心臓を抱えて、ある程度奥まで歩いてきた
後ろを振り返っても出口は全く見えなくて
それまで緊張感で一杯だった心は、だんだんと恐怖に変わっていった
その子に出会ったのはそんな時だった

森の精

その娘は僕の目の前を横切った
姿は人間と変わらないし
歳もそのときの僕と同じ十歳ぐらいに見えた
でも人間ではないなと思った
そう、その娘が浮いていたから
ゆらーっと右から左へと
僕は全身が震えだして
頭の中は真っ白になって・・・

精は左の大きな木の高い枝まですーっと飛んで
そこへ座った

『ねえ、遊ぼう。』

そう聞こえた

いや、真っ白な頭の中にそう響いてきた

『名前は？ 教えて。』

「え!? え...」

僕の頭の中は、白から恐怖の色へと染まっていった

『私はエルっていうの。』

そしてそのエルという精がゆっくり降りてくると

僕は恐怖を押さえきれず、混乱し、後ろを向いて走り出していた
『あ、待って...』

それから数日間はまだまるまるパニックだった様な気がする
あのことを考えたら眠れやしなかった
でもなぜかもう一度行ってみたいくてしかたなくなっただ
次の日曜、僕は勇気をだして再び森へと入っていった
そうしない限り混乱した心の中は落ちつかないような気がした

丁度この前と同じ場所に出ると、僕はまた背筋がぞくっと震えた
そしてその声が聞こえてきたんだ
『また来てくれたんだ』

辺りを、そして上も見回したが誰の姿もない

僕は息をのんで恐る恐る言葉を出した

「君は…誰？」

『私はエル。森の妖精』

「妖精？」

『そう、ほら、あそこにいるのが光の妖精のオーロラ。』

その会話の間に、目の前にうっすらと左に指差したエルの姿が浮かんで
だんだんとはつきりしてきた

きつと驚かせない様にと、エルの気使いだったんだろう

それでも僕はすこし後ずさりしていた

でも怖さはなかったんだ

ただ夢のようで信じられなかっただけだ

指の方向を見ると遠くにも妖精らしき姿が見えた

『あなたの名前は？』

「え、うん。ジェイ」

エルはにっこりと笑うと、僕に手を出した

『遊ぼう。ジェイ』

僕は手をつないだ

妖精に触ると思うと緊張したが、感覚はなく、

気をつけないと、いつのまにか握りつぶしてしまいそうに思えた

そして次の瞬間、僕はエルに手を引かれ浮いて、飛んでいた

「！」

木の間を抜ける迫力や、全身にぶつかるすがすがしい空気

そしてちかちかと目に入る木漏れ日、僕の知らなかった森がまだこんなにある

そうしてるうちに太陽は沈みかけてきていた

「暗くなっちゃったな…」

『ジェイ、勇気があるもんね。怖くないでしょ。』

確かに怖くはないけれど、「勇気なんて…」そう思った

『だってこの前ここに来たときすごく怖かったんでしょ』

それなのにもう一度来るなんて勇気がなきや出来ないわ。』

「そうかな。ありがとう。」

『また遊ぼう』

僕はそれを聞いてはっとした

その時、引越しの日が迫っていた事を思い出したからだ

何も言えず下を向いた僕に、エルは『どうしたの？』と問い掛けた

「実は僕、遠いところへ行くんだ。だから…」

震える声を押さえながらそう言った

そしてもう一度、息を吸い込んだ

「でもきつとまた来るから。絶対に。」

エルは再び笑って僕に近付いて、

『うん、忘れないでね。』

と、僕の頬にキスをする…

煙のように消えて見えなくなってしまった

それと引き換えに、オーロラが現れた
オーロラは光の妖精、彼は僕のために帰り道を光で照らしてくれた
おかげで無事に森から出る事が出来たけれど、
せつかく出会ったばかりの友達と遊び場に、
僕はさよならとも言えなかった事に気付いて、
それからしばらくの間、後悔する毎日だった

半年後の夏休み。僕はそこへ帰る機会を得て、
すぐさま森へと向かった

でも僕はそこで大きなショックを受けた
森は木が切られ、
倒されていた
前はとても広く、
大きく感じたのに、
今見ると

奇妙なほど
狭く見える

もつと
暗くて
微かに
木漏れ日がきらめいていた
幻想的な風景が、
今はない

「そうだ、エル、エルは…」
ぐるりと見渡してみても名前を呼んでもみてもエルの姿は見えないし、
声も聞こえない

僕は奥まで走り、小さい池を回ってその反対側に出た
そちらの方にはかるうじて暗い森が残されていた
でもそこにあるのは、
落ち着きがなく
不安しか感じられない暗さだった

僕は変わり果てた様子に絶望して戻ろうとすると、
そこにオーロラが降りてきた

「あ、オーロラ！ エルは？」

オーロラは黙っていた。僕もそれ以上聞かなかった

『じゃ、俺は向こう行かなきゃ。』

しばらくしてオーロラは急ぐ様に去っていった

僕は唇をかんで、

それから空をずっと見ていた

空はとても広くて、

青い

『ありがとう。』…ふと

そんな言葉がスーッと通りすぎた気がしたけれど、
もうそんな事はどうでもよくなってきてしまった
僕はきつと純粋な気持ちを忘れかけている…

そんな事をしきりに考え続けていただろうか

僕は帰ろうともせず、

辺りは暗くなっていった

オーロラも光を灯しに現れる事はなかった

The Winter Fair

あなたの翼

真っ白に広がって

野原を覆う汚れない雪みたい

静寂の彼方に 今一人

涙を抑えられない あなたに会えるなら

White Snow

There are dreams that I've saved in my heart

Cold wind blows, cold water leaps

Sounds flow, sentimentalities mellow

The Winter Fair

光が育つ

ひとしれず一面に

冷気の中の喜びを吸いこんで

迷いなく

美しい雪とあなた

記憶と記録

雨の中で僕の声はかすれ

何処にも届かず消えてゆく

真っ直ぐに伸びた草の葉

導かれる様に滑り落ちる雫

短いひとときの中に大きな何かを感じた

僕は何て勇気のない男だろう

この”あたりまえ”の世界の中で一歩も動けずにいた

静かな世界だった

こんな色は見たことがあった

それはもう僕の記憶の中にしかなく

もう君達に教えることは出来ない

夕闇と共に何が生まれるのだろう

日に日に一つか二つずつ

形の異なる夜があり

しかしけっして正体を見せない者達
絵画の中に仮の姿を残したまま

風

さつきまであんなに風が強かったのに
今はもう、木々たちはびくりともせず
壊れない暑さの中に
目を閉じて寝入ろうとしているみたいだね
時計は持っているかい？
ああ、確かに動いている
確かに時は流れている
なんだか音が全くしないような気がする
本当はうるさいくらいにあらゆる音で満ち溢れているんだよ
だけでもそれが感じられないような気がする
というか感じていないのではなくて
無音というのを感じているのかもしれない
僕がふらふらとここに来たのは偶然ではないのだけれど
知らない場所にもかかわらず
どうしてもここに来たくてたまらなかったよ
でもそんなに特徴がある場所ではないし
すこし懐かしい普通の風景だね

確かに僕が求めてきた物はここにはないのかもしれない
けれどももう一つのいいモノを見つけた気がする
今日は得したかもしれないね
やっと風が来たね
そろそろ帰るよ
ああ、また来るよ、きつと
それじゃ

愛しき Rainy Days

心の全てを言葉に出来るなら もしかして風も吹くかもね
目が合った瞬間 燃えはじけるもの 君の元へ飛んでゆけ

傘をさす人 手をかざす人 雨降りとは思議なドラマ
一番小さなため息と 幸せの繰り返し

愛しき Rainy Days はぐれないように
内緒で手をつないで雲の中へ

涙の色を塗り分けられるなら 電話とかつながるかもね
逃げ去った直感 もう自由になるよ 僕の中へお戻りよ

土手に咲く花 袖に立つ草 雨降りには小さな意地悪
ガラス窓にぶつかる雫 どこまでも滲んでる

愛しき Rainy Days こぼれないように
表面張力でぴったり側に

思わしき Sunny Days 乾かないように
あの海まで一緒に ずっと一緒に

Answer To L

霧が晴れて
空が見えて

森の入口に佇んでる自分がわかったよ

振りかえっても
もう消えてた

幻と思いはきつと背中合わせたよね

一歩ずつ遠ざかりながら
記憶を辿ってゆく
やわらかな森の吐息を
体の中に残して
さよならのかわりに
命の微笑を・・・

再び会えると信じて
砂利道を辿るけど

優しさに裏切られるまま
ささやかな愛を分ち
さよならのかわりに
命の償いを・・・

月夜

遙か地平の泉より
来たる真紅の旅人よ
宿りて静かに休まれよ
月も満ちては遊行し
蒼きこだまを返しけり
涙多く満ちたりて
我潤いて彼（か）の空と
見えざる律にて繋がりぬ
今宵清かな風吹かん
薄霧薫りて夢まどひ
我が愛づ音色の宝庫なり
遙か去りゆく旅人よ
帰路に我が夜を選ばれよ
知らざる日々は巡る理
故に語るれば懐かしきかな

蛍

片隅に潜むは蛍の光
世界が無関心に寝静まって
朝には起き出すのとは別の所で
体をかがめて覗きこんでは
少し興奮しながら光を追ったもんだ

緑色の不思議

そこに命の力と愛を感じ
たびたび涙も誘われたかもしれない

くさむらに想うは蛍の光

いつか僕らの世界が終わり
やんわりと燈る花火の様に
夜の彩りを満たさんことを

雲と魚

魚はどこを泳ごうと自由である

または

雲はどこを漂おうと自由である

かつ

私はどこでそれを見ようと自由である

または

私はどこにそれを描こうと自由である
すなわち

貴方はどこに出現しようと自由である
よって

私はどこへ出向こうと自由である

(そう) 雲に魚が乗っている

魚は雲を引き連れてゆく

魚が泳ぐたび、雲のしぶきが勢いあがる

秋刀魚、鯛、鯖、鰹

多種多様の光り輝く姿

魚は季節ごとに丘の上の森を訪れる

時代は変わった

魚は空を支配し始め

象は海に帰り始め

人は地球のほんの隅で生きるのみ

時折古い民族が空かける魚を見かけては
羨望の歌を作り夜毎歌いつづけるのみ

魚はどこを泳ごうと自由である

雲はどこを漂おうと自由である

そしてわれわれは生きている

私自身と貴方がたが生ける限り

謙虚に

静かな風が吹いてきて

遠慮気味に森へ入ってゆく

私もつられて足を踏み入れ

迷いかけた場所で腰を下ろす

かすかな香りが少しずつ

まじり合いながら近づいてくる

小さな音が少しずつ

手をつなぎながら通り過ぎてゆく

私も

しかし今はただ、思うだけなのだ

紫色の空

この星に生きたこと
それは私の記憶の中にあつて
もう二度とはないかもしれないことばかり
真夏の朝焼けに向かつて手を広げ
思いきり、湿った空気を吸い込んだあの時
それはもう、消えた体験だが
私はとても現実感を保ったまま
頭の中で生かして行ける
そして同じような波長でどこかに立ち
何かを見、何かを聞き、
何かと一体になる時
私は懐かしき感情を溢れさせ
ただ狂ったように泣き果てるのだろう

花畑

町のはづれの森の中
そこは大きな花畑
いつか二人で来たかった
ずっと二人で来たかった
そつと寝転び目を閉ぢて
広がる香り吸い込んで
二人手と手をつないだら
夢の中まで行けそうだ

ずつとこんな一日が
繰り返されればいいのにね
飽きることもなくときめきが
続いてゆくと信じよう

忘れたところにまた来よう
年老いたところにまた来よう
香り豊かな無限の部屋
そこは大きな花畑

特異点の哲学者

投げられた石ころのように僕は放物線を描き
頂点を通り過ぎ
果てしなく自由に落ちてゆく

僕は
僕の意識は無制限に大きさを変え
時に鋭く時に穏やかに
時にすばやく時に静止して
それでも命が永遠に続くがごとく
道は見えぬところへと続くのみ

思い、考えははるか彼方
天空輝く恒星とも一体となり
また、いつかは宇宙を飲み込むだろう

そう
夜の静かな間だけ

僕の意識は無をも支配する

飛ぶ二

大都市の光がどんどん遠ざかってゆく

夜の雲の上へあつという間に昇る

今頃真下は一面の大海原

一眠りすれば広大な砂漠の上

大気の中を突き進んでゆくのは

あらゆる困難に立ち向かってゆくみたいだけれど

実は大地に隙間なく広がっているあらゆる悲しみから逃げているだけなんだろうな

夜の闇を果てしなく追いかける

見下ろせば夢が浮かんでいる

今にもたやすく入り込めそうだけど

僕は僕だけの夢を見るよ

僕だけどんどん速度を上げて

いくつもの光を追い越してゆく

あるとき
僕はその速度に怖くなる
だからもうそろそろ戻ろうと思うよ
旅はおしまい

うれしい

ひまわりのお昼寝
起こさないように
いつもの帰り道が
心の宝物

魚の雲

暖流の風

歌は深く絡み合う
ほんの少しゆれて
愛しく光り

ときめくこの心
たのしい うれしい

汗をかいた体
冷えすぎないように
ゆっくり息をして
心にサブリメント
夕立の間

びしょぬれのシャツ
さわやかにそして涼しく
ほんの少しどきどき
夜を待っている
きつと熱帯夜さ
くるしい でも うれしい

とろとろの夕暮れ
はじけだす虫の声
目を閉じ耳を澄ます
心のクールダウン
清流のそば
切り株のいす
コンサートはいつもそこにある
繰り返すドラマ
ほんの少し泣きたい
今 生きていること
やっぱり うれしい

神社の森

神社の森がゆらゆらと揺れている
待ち合わせは鳥居の下で

春分過ぎの午後4時は冷え沈み
二人のコート 重ねてた

ケヤキの側 宝物を埋めて
君は小指を差し出した

静かな色の街灯がともりだす
風はやんでる けんかも終わり

堰が切れた 君の涙がしみて
僕の心もゆらゆら

ほっぺをつねる泣き顔がいとしくて
一番星が君を慰めてる

列車の外に草原が揺れている
君の歌が心に聞こえる

神社の森がいきいきと目を覚ます
新しい春 君を見守ってる

千波湖

白い鳥が 街の中の湖に眠っている

光は硬直した建物の間を縫って
一面の空を大地にくり貫く

春の休日に公園は
キャッチボールかバドミントン

夕暮れ迎えて
ママが着せてくれる トレーナー
ホットカーペットのやさしきで 包まれる休日

スワンボートの休息

人々の想い

詩的な弁解

見たこともない流星群を見たり
何事も無いような植木鉢の花に
目が留まったとき きつと
ためらいもせず
寝転んでしまおう

たくさんのシロツメクサの中から
偶々選んだひとつをいとおしく見つめていて
今日 雨が降らず
夕日に落ち着いていくのを
心から感謝しよう

春

しづかに 夜空に 春が来て
色白の 赤子の頬のような桜色の星と
明るくて強く そしてやわらかな菜の花色の星と
遙か深く広がる漆黒の宇宙は
見た目以上に何かに満たされて 包んでくれる

しづかに 夜空に 春が来て
せせらぎの向こうに広がる空色の星と
風に薫る若草色の星と
ほんの少しの間だけ ぼくらは共に生きている